D-6

北琉球沖縄語今帰仁謝名方言における除括性 (clusivity)

下地理則

要旨

本発表の目的は，北琉球沖縄語今帰仁謝名方言における「私たち」の 2 形式（wattaa と agamii）の使い分けを記述することである。今帰仁村を含む沖縄本島北部の諸方言には，「私たち」にワッター系とアガ系の 2 系列あることが知られており，ワッター系は除外，アガ系は包括という除括性（clusivity）の区別として分析されてきた (内間 1979, 1994)。しかし，謝名方言における wattaa（ワッター系）と agamii（アガ系）の対立はこの定説では説明できないことが明らかとなった。本発表では，wattaa と agamii の対立が，除括性と異なる観点である人称対立性，すなわち「聞き手側（あなたたち）ないし他者側（彼ら）と対立しているか否か」により適切に記述できることを示す。wattaa は人称対立性があり，（あなたに対する）「私たち」（＝除外に対応）と（彼らに対する）「私たち」（=包括に対応）の意味で使われる。一方，agamii は人称対立性のない「私たち」であり，会話参与者（私とあなた（たち））のみを単に指すことから結果的に包括に対応する。

1　はじめに

本発表の目的は，北琉球沖縄語今帰仁謝名方言における「私たち」の 2 形式（wattaa と agamii）の対立を記述することである。この対立は，一見すると除括性（clusivity; Filimonova 2005），すなわち除外（聞き手を排除）vs. 包括（聞き手を包含）の区別に即しているように見える。

(1)　a. **除外**：客 3 人のうち 1 人が店員に向かって注文する

wattaa=ja suba　　kamabin.

W=は　　沖縄ソバ 食べます

「私たちは沖縄ソバを食べます。」（wattaa）

b. **包括**：客が 3 人いてメニューを決めている

agamii=ja nuu　kamiiga?

A=は　　なに 食べようか

「私たちは何を食べようか？」（agamii）

確かに，今帰仁村を含む沖縄本島北部の諸方言では一般に「私たち」にワッター系（謝名方言 wattaa）とアガ系（謝名方言 agamii）の 2 系列あることが知られており，ワッター系は聞き手を含まない除外形，アガ系は聞き手を含む包括形というのが定説となっている (内間　1979, 1994, 伊豆

山 1992, かりまた 2008, ファンデルルベ 2020)[1]。しかし，のちに詳しく論じるように，謝名方言における wattaa と agamii の対立は単純に除括性によって説明できない。例えば以下のように包括文脈であっても除外形と思しき wattaa が使われ，包括形と思しき agamii が使用不可になる。

(2) **包括**：5 人の客が 3 人対 2 人の 2 テーブルに分かれて座る。3 人テーブルの会話。

attaa=ja suba giseesiga, {wattaa/*agamii}=ja nuu kamiiga?
あれたち=は 沖縄ソバ らしいけど {W/*A}=は なに 食べようか

「彼ら（=2 人テーブル）は沖縄ソバらしいけど，私たちは何を食べようか？」

本発表では，wattaa と agamii の対立関係が，従来の観点である除括性，すなわち「聞き手を含むか否か」ではなく，「聞き手側（あなたたち）ないし他者側（彼ら）と対立しているか否か」（**人称対立性**）という観点で適切に記述できることを示す（**表** 1）。(1a) の wattaa は，除括性については確かに除外であるが，除外の定義上，聞き手を排除した（すなわち聞き手に対する）「私たち」（vs.2）というふうに，聞き手側との人称対立がある。(2) の wattaa は聞き手を含む点で包括であるが，会話参与者（話し手と聞き手）である客以外に，attaa「彼ら」で指示される 3 人称と対立する形で「私たち」（vs.3）が使われる点で人称対立性がある。一方，(1b) の agamii もまた除括性に関しては包括であるが，「私たち」と対立する 3 人称の存在が含意されず，人称対立性がない。

表 1　ワッター系とアガ系：謝名方言と北部方言一般

除括性	人称対立性	例文		謝名方言の実態	北部方言の定説
除外	あり（vs. 2）	(1a)	（店員に）**私たち**は沖縄ソバを食べます。	wattaa	ワッター系
包括	あり（vs. 3）	(2)	（客同士で）彼らは沖縄ソバらしいけど，**私たち**は何を食べようか？		アガ系
	なし	(1b)	（客同士で）**私たち**は何を食べようか？	agamii	

2　謝名方言の「私たち」をめぐる問題点

謝名方言の人称代名詞パラダイム暫定版を**表** 2 に示す（より適切な体系化は結論で示す）。1 人称に関して，本発表で扱う複数形 (PL) の wattaa と agamii に加え，双数形 (DU) の wattai と agatai「私たち（2 人）」が存在することが，発表者の最近の調査で明らかになっている[2]。これらの使い分けについては不明な点が多いが，現時点でのデータに関する限り，本発表で明らかにする複数形 wattaa と agamii の違いに並行的である可能性が高い。以降，複数形の wattaa vs. agamii の使い分けに焦点を当てる。双数形の使い分けについては，結論で再度取り上げる。

[1] ワッターとアガは，日琉祖語に遡ると考えられる 1 人称語根ワとアの区別に対応する。謝名方言の wattaa は単数 wan に複数接辞-ttaa がついたものであり，agamii はアに属格助詞=ga がついたものに mii「身」が後続した語構成をしている。なお，ワとアの違いは日本語学全般で様々に議論されるが，沖縄語北部方言に限って言えば，上記の通り除外（ワッター系）と包括（アガ系）の区別に対応するという議論が目立つ。研究史の簡単な概観は下地 (forthcoming) を参照されたい。

[2] wattai/agatai の双数接辞-(t)tai は，tai「2 人」と同根である。琉球諸語の 1 人称双数形は沖縄語を除く奄美，宮古，八重山全域に見られ，その元となった構造体（「我が 2 人」に対応）は琉球祖語に（あるいは日琉祖語にまで）遡る (下地 forthcoming)。謝名方言の wattai と agatai は今回（複数形を）調査していた中でたまたま見つかり，詳細はまだ不明であるが，双数形が沖縄語にも存在することが研究史で初めて明らかになった。

1 **節**で述べたように，ワッター系とアガ系の対立は本質的に除括性によるというのが定説である。しかし，その除括性は，本発表でいう人称対立性と渾然一体となったものであった。内間 (1979, 1994) は除外について，その定義上，聞き手を排除する「私たち」であるから，これはいわば「あなた（たち）」に対する「私たち」であると指摘する。伊豆山 (1992: 9) はさらに，包括は「他者・彼（ら）に対する自」とする。

先行研究の問題は，除括性と人称対立性を分離して考えていない点にある。除外が 2 人称との対立関係にある点は間違いないが，包括は必ずしも 3 人称と対立関係にあるとはいえない。包括文脈は，すでに見た (2) のように人称対立性のある包括文脈と，(1b) で見た人称対立性のない包括文脈を設定できる点で除外と大きく異なる（**表** 3）。言語類型論的には，包括が人称対立を帯びる可能性に取り立てて注意が向いておらず，(1b) のような例こそ包括の典型的な文脈と考えられてきたとさえ言える（例えば Cysouw 2005 などを参照）。除括性の観点から，(1b) のような例を**一般包括**と呼ぶことにする。(2) のような人称対立性のある包括は**対立包括**と呼ぶ。一般包括と対立包括の区別は琉球諸語の先行研究が見逃してきた点であるとともに，除括性と人称対立性のいずれが効いているかを知る上で重要なポイントとなる。

表 2　謝名方言の代名詞体系

	1 人称	2 人称	3（指示代名詞遠称）
SG	wan	ʔjaa	ari
DU	wattai		
	agatai		
PL	wattaa	ittaa	attaa
	agamii		

表 3　調査項目

除括性	人称対立性	「私たち」
除外	あり (vs. 2)	（あなたに対する）「私たち（**除外**）」
包括	あり (vs. 3)	（彼らに対する）「私たち（**対立包括**）」
包括	なし	「私たち（**一般包括**）」

3　調査

3.1　調査法，調査票，調査結果

除括性と人称対立性の組み合わせから想定できる 3 種のカテゴリー（**除外**，**対立包括**，**一般包括**）を網羅した調査票を作成し，母語話者 1 人（60 代女性）をコンサルタントに Zoom を用いたオンライン調査を行なった。コンサルタントは言語学者であり，注意深い内省によって微細な容認性の違いを報告できる方である。文脈を視覚的に理解するための画像を見ながら例文を翻訳してもらった。

表 4　調査結果の概観

除括性	人称対立性	「私たち」	
除外	あり (vs. 2)	wattaa	（あなたに対する）「私たち（**除外**）」
包括	あり (vs. 3)	wattaa	（彼らに対する）「私たち（**対立包括**）」
包括	なし	agamii	「私たち（**一般包括**）」

調査結果のサマリーを**表** 4 に示す。調査例文つきの詳細な結果は**表** 5 に示す。**表** 4 から，wattaa

と agamii の使い分けは除括性の切れ目ではなく人称対立性の切れ目で説明がつく。よって，除括性ではなく人称対立性によって使い分けがなされていると結論づけることができる。ただし，対立包括ないし一般包括として設定した文脈で両方の形式が使えると判断されたケースがある（表 5 の右端列の W/A）。以下ではこれらを中心に，またそれ以外に注目すべき点（人称対立が存立し得ない id6-1）を解説する。なお，一般包括で agamii が使えない id4-2 については結論で述べる。

表 5　調査結果（詳細）

id	エピソード	除括性	人称対立性	カテゴリー	文脈設定	例文	「私たち」
id1-1	食堂	除外	vs.2	除外	3人で定食屋にきて同じテーブルにつく（他に客はいない）。1人が店員に向かって注文する。	**私たち**は沖縄ソバを食べます。	**W**
id1-2	食堂	包括	vs.3	対立包括	5人で定食屋にきて，3人のテーブル（A)と2人のテーブル（B)というふうに別々のテーブルにつく。Aのテーブル（3人）の1人が同じAの2人に言う。	（Bの人たちは沖縄ソバらしいけど）**私たち**は何食べようか？	**W**
id1-3	食堂	包括		一般包括	5人で定食屋にきて同じテーブルにつく（他に客はいない）。1人が 4 人全員に向かって言う。	さて，**私たち**は何食べようか？	**A**
id2-1	合宿	除外	vs.2	除外	合宿で，太郎たちのグループとあなたのグループが一緒の部屋で明日の朝食の担当の話し合いをしている。先生がやってきたので，あなたがいう。	洗い物は**私たち**がやります。	**W**
id2-2	合宿	包括	vs.3	対立包括	合宿で，太郎たちのグループとあなたのグループが一緒の部屋で明日の朝食の担当の話し合いをしている	料理はあんたたち（＝太郎たち）がやるんだね。わかった。じゃあ洗い物は**私たち**がやろう。	**W**
id2-3	合宿	包括	vs.3	対立包括	合宿で，あなたのグループの部屋にて。太郎たちのグループが料理担当になったことをみんなに伝えながら，あなたがいう。	太郎たちは料理をするんだって。洗い物は**私たち**がやろう。	**W/A**
id2-4	合宿	包括		一般包括	合宿で，あなたのグループの部屋にて。いろんな仕事のうち，洗い物をやりたいあなたが提案する。	洗い物は**私たち**がやろう。	**A**
id3-1	野球	除外	vs.2	除外	AチームとBチームの野球の試合前。グラウンドで，両チームが見えるところでAの監督がBに向かって叫ぶ。	**私たち**はお前たちには負けないぞ！	**W**
id3-2	野球	包括	vs.3	対立包括	AチームとBチームの野球の試合前。グラウンドで，Bチームを指差しながら，Aの監督が自分の選手たちに呼びかけている。	**私たち**はあいつらには負けないぞ！	**W**
id3-3	野球	包括	vs.3	対立包括	AチームとBチームの野球の試合前。Aチームのロッカールームで監督が選手たちに呼びかけている。	**私たち**はあいつらには負けないぞ！	**W/A**
id3-4	野球	包括		一般包括	AチームとBチームの野球の試合前。Aチームのロッカールームで監督が選手たちに呼びかけている。	**私たち**は負けない。自信持て！	**W/A**
id4-1	英会話	除外	vs.2	除外	クラスに3人しかいない小さなクラス。全員幼馴染。英語の会話練習でその3人でグループを作った。回ってきた先生にいう。	**私たち**は一緒にやります。	**W**
id4-2	英会話	包括		一般包括	市民講座の英会話の授業で，受講希望が3人だけだった。英語の会話練習でその3人でグループを作った。	人数もこれだけだし，**私たち**一緒にやりましょう。	**W**
id4-3	英会話	包括		一般包括	クラスに3人しかいない小さなクラス。全員幼馴染。英語の会話練習でその3人でグループを作った。	**私たち**一緒にやろうね。	**A**
id5-1	遠足	除外	vs.2	除外	遠足のバス乗り場。離島の学校でクラスは 2 つしかない。バスが2台きた。1組の先生が2組の先生に向かっていう。	**私たち**はこのバスに乗る。あんたたちはあのバスに乗って。	**W**
id5-2	遠足	包括	vs.3	対立包括	遠足のバス乗り場。都会の学校でクラスは5つある。バスが4台来ており，3-5組がそれぞれ別々のバスに乗った。残り1台のバスをめぐって，1組の担任が2組の担任に対して言う。	他の組はもう乗っているから，**私たち**は同じバスに乗ろう。	**W**
id5-3	遠足	包括		一般包括	遠足のバス乗り場。離島の学校でクラスは2つしかない。バスが1台しか来なかった。1組の担任が2組の担任に対して言う。	**私たち**は同じバスに乗ろう	**A**
id6-1	その他	包括		一般包括	人類一般について	**私たち**は水がないと生きていけない	**A**
id6-2	その他	包括	vs.3	対立包括	人類と火星人を対比して	火星人は平気だけど，**私たち**は水がないと生きていけない	**W**

3.2 合宿の文脈について: id2-1〜id2-4

id2-2(3a) は,「私たちの班」と「太郎たちの班」が同じ部屋にいる状況における対立包括文脈として設定し，**id2-3**(3b) は「私たちの班」と,「太郎たちの班」が別々の部屋にいる状況における対立包括文脈として設定した。後者で wattaa も agamii も使われると判定された。

(3) a. **対立包括** (**id2-2**)：合宿の夜。あなたの班と太郎の班が，明日のごはんの担当について話し合いをしている。太郎の班が料理をするとその場で聞いて，あなたが班員に向かっていう。

areemun=ja {wattaa/*agamii}=ga asa.

洗い物=は　{W/*A}=が　　やろう

「(料理は太郎たちがやるんだね。わかった。じゃあ）洗い物は私たちがやろう。」

b. **対立包括** (**id2-3**)：合宿の夜。太郎の班は別の部屋にいる。太郎の班が料理担当だと聞いている。あなたが班員に向かっていう。

areemun=ja {wattaa/agamii}=ga asa.

洗い物=は　{W/A}=が　　やろう

「(太郎たちは料理をするんだって。）洗い物は私たちがやろう。」

(3a) では他者（太郎の班）がその場におり,「私たち」と他者（太郎たち）で指示空間が二分されること（人称対立があること）がわかりやすい。一方，(3b）では他者はその発話空間に存在せず,「私たち」と他者との人称対立が自明ではない。コンサルタントによると,「太郎たちを意識すれば wattaa を使う」という。このように眼前に他者がいるかどうかで人称対立性に揺れが出てくる現象は次に見る野球の試合の文脈でも見られる[3]。

3.3 野球の文脈について：id3-1〜id3-4

id3-3(4a) と **id3-4**(4b) はそれぞれ一般包括，対立包括として設定したが，いずれの形式も用いられるとの判定であった。ただし，以下の例文それぞれに記すように，選好性が異なっている。

(4) a. **対立包括** (**id3-3**) 試合前のロッカールーム。監督が自分の選手たちに向かっていう。

{wattaa/agamii}=ja attaa=ni=ja　　makiraran=doo!

{W/A}=は　　あいつら=に=は 負けない=ぞ

「私たちはあいつら（B チーム）には負けないぞ！」(両方可能：wattaa 選好）

b. **一般包括** (**id3-4**)：試合前のロッカールーム。監督が自分の選手たちに向かっていう。

{wattaa/agamii}=ja makiraran=doo! zisin mutee!

{W/A}=は　　負けない=ぞ　　自信 持て

「私たちは負けないぞ！自信持て！」(両方可能：agamii 選好）

[3] (3a, 3b) の「私たち」はいずれも情報構造的には対比焦点 (contrastive focus) である。すなわち,「洗い物は X がする」の X の集合に { 私たち，太郎たち } が想起され,「私たち」が選択される。しかし，上で述べたように人称対立性には違いがありそうである。よって，人称対立性は情報構造とは異なるレベルの，より眼前指示（その場にいるかどうか）に関連した，すなわち指示空間における人称の対立に関連した概念であると考えられる。

(4a) も (4b) いずれも，発話者（監督）のチームと敵対チームのロッカールームは別であるから，発話場面には敵対チームはいないことになる。しかし，(4a) では，例文内に「あいつら」が明示されている。さらに，**id3-2**(5) は眼前に敵対チームが存在し，ここでは wattaa だけが選択される。

(5) **対立包括** (**id3-2**)：試合前のグラウンド。監督が敵チームを指差しながら，自分の選手たちに向かっていう。

{wattaa/*agamii}=ja attaa=ni=ja makiraran=doo!
{W/*A}=は あいつら=に=は 負けない=ぞ

「私たちはあいつら（B チーム）には負けないぞ！」（wattaa のみ）

このように，指示空間に敵対チームの存在を強く想起させるほど wattaa の使用がしやすくなることから，やはり wattaa は人称対立性を帯びているという本発表の見方に即したものである。

3.4 その他（人称対立が生じ得ないケース）：id6-1

id6-1（以下の (6) は人称対立が生じ得ない文脈，すなわち発話者・聞き手以外の他者が存在し得ない文脈（一般包括の解釈しか許されない文脈）である。この場合 agamii だけが用いられる。

(6) {*wattaa/agamii}=ja mizi=nu neenuba nuci=nu neen.
{*W/A}=は 水=が 無ければ 命=が ない
「私たちは水がなければ生きていけない（lit. 命がない）。」

ここでさらに文脈を改変し，**id6-2** に示してあるように「火星人は水がなくても生きていけるが」などの前提を付け足して普遍的記述をキャンセルし，対立包括文脈にすると（すなわち，火星人に対する「私たち」という解釈を可能にすると），wattaa だけが認可される。

4 おわりに

謝名方言の代名詞体系は，**図** 1 のように，人称対立性（三角形平面，数字は人称）と単複（縦軸，上が単数，下が複数）からなる三角柱状の体系をなしていると考えるべきである（3 人称は指示代名詞遠称で代表）。

この体系において，wattaa は wan の複数形として位置付けられる。これは単数に複数接辞-ttaa をつけるという形態論的な特徴に反映している。これまで，沖縄語の「私たち」の 2 形式（ワッター系とアガ系）は，除括性の対立を前提としてペアのように捉えられてきたが，少なくとも謝名方言の場合，wattaa と agamii は体系内でペアをなしておらず，人称代名詞体系において 1 人称単数に対立する複数形は wattaa のみであると考えた方が良い。この方言の人称代名詞体系は人称対立性を基盤にしているのであって，除括性のように見える対立は結果的なものである。すなわち，wattaa は（あなたたちに対する）「私たち」の意味では除外に対応するが，同じ形が（彼らに対する）「私たち」の意味では包括に対応する。一方，agamii は会話参与者（私とあなた（たち））のみを単に指すことから結果的に包括に対応するが，人称対立性を軸とした**図** 1 の代名詞体系にはうまく組み込めない。

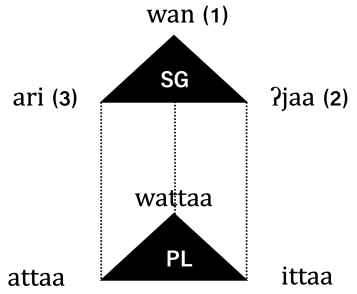

図 1 謝名方言の代名詞体系

本発表の残された課題を列挙する。まず，agamii の位置付けである。調査の結果，agamii は他の人称代名詞と大きく異なり，慣習化されていない即席の（新規な）グループを指すことができないという特徴がわかっている。例えば新学期にクラス替えがあったあと，旧クラスメイトに「今日から私たちは別々のクラスだね」という場合は agamii が問題なく使われるが，新しいクラスメイト（すなわち初めて「私たち」という括りになる集団）に対して「今日から私たちは同じクラスだね」という場合には agamii が使えず，wattaa のみが可能となる。**表** 5 の **id4-2** を見ると，一般包括であるのに wattaa が使われている。これも即席のグループだからである。同じ一般包括の **id4-3**（幼馴染の「私たち」; agamii 使用）と対照されたい。

人称対立性が必須となる wattaa がここで代わりに使われる点については未解決であるが，少なくとも慣習化と無関係に「私たち」を指せるのが wattaa だけである点は重要である。1 人称複数代名詞はその指示対象がどうであれ，「発話者とその仲間」であれば使えるはずであるが，その重要な特徴を agamii は持っていないのである。agamii が使えない一般包括文脈で wattaa が使える点の理論的な解釈については今後の課題としたい。

次に，本発表で詳しく扱わなかった wattai と agatai「私たち（2 人）」の分析が残されている。ただし，現時点のデータによると，これら双数形は複数形 wataa と agamii の対立に並行的である可能性が高い。wattai は必ず人称対立性を持っているが，agatai はそうではない。さらに，agatai は慣習化された 2 人組（例えば夫婦，兄弟，ずっと一緒に戦ってきたダブルスのペアなど）に使われやすく，即席のペアには使われない（この場合，wattai が使われる）。

最後に，これまで除括性を前提として考えられてきた沖縄語北部方言のワッター系とアガ系の対立を再検討すべきである。先行記述のデータを見る限り，除外と（おそらく）一般包括を中心に調査されており，明確に対立包括であるとわかる例が少ない。これを調べなければ除括性と人称対立性のどちらが効いているのかわからない。ここで，名護市幸喜方言（かりまた 2008）について，「aga は聞き手を含む包括的複数 inclusive plural の代名詞である。wattaa は聞き手を含まない exclusive plural の代名詞である（中略）ただし，wattaa を包括的複数で使用することもある」（かりまた 2008: 19, 下線は発表者）という重要な指摘がある。ここでいう「包括」が対立包括である可能性があり，その場合，人称対立性を基盤とした対立ということになる。

参照文献

Cysouw, Micheal (2005) “Inclusive/exclusive forms for ‘we’,” in Haspelmath, Martin, Matthew S. Dryer, David Gil, and Bernard Comrie eds. *The world atlas of language structures*: Oxford University Press, pp. 162-169.

Filimonova, Elena (2005) *Clusivity: typology and case studies of the inclusive-exclusive distinction.*: John Benjamin.

伊豆山敦子 (1992) 「琉球方言の 1 人称代名詞」,『国語学』, 171: 1-19.

かりまたしげひさ (2008) 「沖縄県名護市幸喜方言の名詞の格＝とりたて–ga 格、nu 格、ハダカ格、ja のとりたて–」,『日本東洋文化論集』, 14: 1-80.

ファンデルルベハイス (2020) 「沖縄県宜野座村惣慶方言の代名詞・指示詞・疑問詞」,『琉球の方言』, 44: 15-34.

下地理則 (forthcoming) 「琉球諸語の双数–類型と歴史」, ナロックハイコ（編）『日本語と近隣言語における文法化』, ひつじ書房（academia.edu で草稿公開中）.

内間直仁 (1979) 「アガーミ意識とワッター意識–琉球方言の指示代名詞から」,『琉球の方言』, 5: 200-219.

——— (1994) 『琉球方言–助詞と方言の研究』, 武蔵野書院.